知床財団 10年プロジェクト

これからの私たちの羅針盤

私たちは 1988 年の発足以来 30 年の節目を迎え、「知床財団 10 年プロジェクト」を定めました。すでに知床財団は、新たな世紀に向けて私たちが実現しようとする大きな目標である「知床財団の 21 世紀ビジョン」を制定していますが(2003 年制定、2006 年改定)、同ビジョンを踏まえながらも目を凝らせば見通すことができる 10 年という期間の中で進める具体的な事業を今改めて定めたのです。

10年プロジェクトは、知床財団の活動を「国立公園・世界自然遺産地域の保護と利用の調和の実現」、「野生生物と折り合いをつけていく地域社会の実現」、「しれとこ 100平方メートル運動の推進」及び「自主・自立の旗を立てる」の4つの大きなくくりで整理し、10年後にめざす姿を明らかにしました。その中に、3つの最重要プロジェクトと、従来とは異なる視点の2つの新規プロジェクトを組み込みました。

また項目ごとに現状に関する課題認識と、私たちがめざす方向性を記し、10年後に実現させるイメージも示しました。

このプロジェクトは私たちだけで実現するものでありません。 斜里町・羅臼町、その他の関係機関や地域の皆さんとも対話を 重ねながら、ともに創り上げていこうとする、近い将来の目標 です。



projest 1

国立公園 世界自然遺産地域の保護と 利用の調和をめざして project 2

野生動物と 折り合いをつけていく 地域社会をめざして

project 3

しれとこ 100 平方 メートル運動の推進 projest 4

自主・自立の旗を立てよう

■知床財団の使命

私たち知床財団は知床半島をホームグラウンドとし、

世界遺産知床の自然を守り、より良い形で次世代に引き継いできます。

野生生物やその他の自然環境の保全・管理に携わる組織として常に先駆者であり続け、

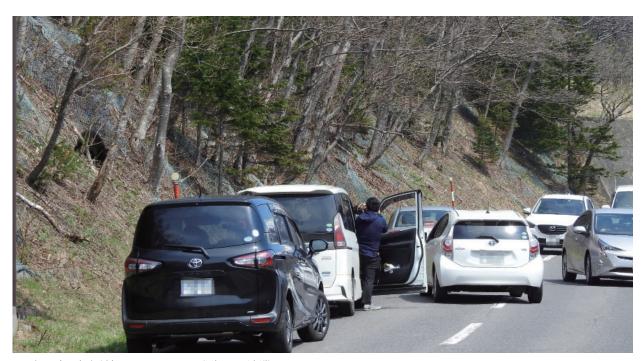
人間が自然と親しみ調和していける社会の発展に寄与します。



ヒグマ生息地における 新たな国立公園利用のしくみづくり



~ MaaS ~



ヒグマ (写真左端)を見るために発生した渋滞.

現状と課題・私たちがめざすもの

知床国立公園の最大の課題、それは高密度に生息するヒグマと公園利用の折り合いをつけることです。問題の多くはビジターが必ず通ることになる道路沿いで発生しています。路上で頻繁に発生する野生動物とのトラブル、特にヒグマへの接近や餌やり行為を防ぐとともに、国立公園の魅力をアップし、渋滞や駐車場不足も解消するしくみを作ることが喫緊の課題となっています。その解決の方向性は、ビジター自ら選択するような利便性とエンターテインメント性を兼ね備えた公園内移動サービス(Mobility as a Service)を提案し、社会実験を通して制度を確立することだと考えています。私たちは M もっと、a あかるく、a あそべる、S しれとこ、「MaaS」の実現をめざします。

10年後は?

ICT 技術を基盤としたモビリティ・サービスが公園利用のインフラとして機能しています。それにより道路周辺でのヒグマとのトラブルは解消し、公園内外の移動システム自体が自然教育的な要素を含んだ野生動物観察の場として知床観光の魅力の一つとなります。このサービスは、自律的な利用調整や管理費を確保する機能を提供し、エコツーリズムの展開、インバウンドへの対応、ロングトレイルやバックカントリーを楽しむしくみ、知床らしい冬期の利用を推進するプラットフォームともなっています。

知床半島先端部地区の利用と保護



原生の海岸を行く知床岬へのトレッキング.

現状と課題・私たちがめざすもの

知床岬方面へのトレッカーやカヤッカーなどに対し、事故防止や自然保護のためのルールを確実に情報提供できる法的担保を持つしくみ(自然公園法による利用調整地区制度など)の導入をめざします。先端部地区を原生自然にあこがれる人々が世界中から訪れる魅力あふれる地域にしていきます。ルシャ地区では厳格な保護と利用を調整するしくみを整え、世界遺産の核心と野生を体験できる場を創設します。

知味五瀬 フィールドハウス ルヤフィールド ハウス ・ 知味 自然 ・ センター ・ 知味 半島 先端 部 地区

10年後は?

法的担保を伴う利用をコントロールするシステムが 先端部地区全域をカバーしている状態が実現していま す。ビジターが的確な情報に基づいて安全なコースや 必要な装備、天候について判断ができるように、また、 自然に悪影響を与えることなく楽しむ知識を得ること ができるように、事前レクチャーの受講等が義務化さ れているでしょう。知床岬は原生自然を愛し楽しむ世 界中の人々が集まる場所になっています。

ルシャ地区は世界でも数少ないヒグマ観察地として 厳格なルールに基づいて管理運営されています。同地 区のプログラムは、ヒグマとの共存や世界遺産の価値 を考える環境教育の場として活用され、常にキャンセ ル待ちの人気を博しているでしょう。

中央部連山地区の保護と利用 (知床連山、羅臼湖~知西別、遠音別)



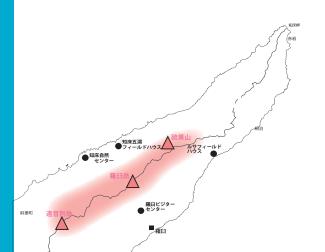
知床連山(硫黄山)の稜線を行く

現状と課題・私たちがめざすもの

知床半島の脊梁をなす山岳エリアを走る登山道の難 易度を明確化し、登山者のニーズとのマッチングがで きる情報提供を行います。看板や道標、パンフレット の地図などで用いられるピクトを、海外からの来訪者 にも対応できるユニバーサルデザインに整理統一して いきます。また、知床半島の多様な環境を体験できる 新たな登山道のコース群の整備をめざします。

10年後は?

各登山道は難易度が明確化され、海外からの登山者 も含めて分かりやすく情報提供がされるようになり、 それぞれのニーズに合わせた登山ルートの選択が可能 となっています。また、斜里羅臼両町をつなぐ新たな 登山ルートや連山から知床岬まで歩くコースなど半島 の多様な環境を踏破していくコース群とそれらへのア クセスが整備されます。海と山がコンパクトに連なる 知床の自然の魅力が、世界の登山者を魅了しているで しょう。





日本語のみの登山道標識

国立公園内の園地施設などを拠点とした活動展開①

一知床五湖~カムイワッカ地区一



高架木道(写真下)と森の中の歩道に分かれた知床五湖の利用.国内2ヵ所だけの利用調整地区.

現状と課題・私たちがめざすもの

知床五湖は、春~秋期は先進的な利用システムが整えられていますが、冬期については持続的な利用のあり方がいまだ混沌とした状態にあります。自然公園法による利用調整地区制度の冬期への展開も視野に入れた見直しを進めます。また、知床五湖のモデルを応用し、この地域全域でビジターが適切な情報提供を得ることができるシステムへと発展させます。利用調整地区の手数料収入が、サービス向上と魅力アップ、環境保全などに幅広く再投資される好循環を実現します。

大幅に魅力が後退してしまったカムイワッカ地区では、新しい散策ルートやオホーツク海を眺める展望地などの整備を進めるとともに、知床連山登山口としての機能を強化し、縦走利用者に配慮した公共交通手段の利便向上を図ります。

10年後は?

知床五湖の利用調整システムは通年化され、冬期も含めた保護と利用の調和が図られています。「五湖モデル」を応用した情報提供や利用調整のしくみは、公園内の要所要所に広く適用され、ビジターの利便性や安全性・魅力の向上と維持に貢献していることでしょう。認定手数料は受益者負担の観点を取り入れた利用料として位置づけられ、公園全体の保全管理に幅広く活用されています。

知床五湖で行われている引率者の養成や登録の制度 を知床全体のエコツアーガイドの統一資格に発展させ ます。知床五湖のしくみが新たな人材を育成し、より 多様で高度なフィールドをめざす自然ガイドの登竜門 となっています。

国立公園内の園地施設などを 拠点とした活動展開②

-羅臼ビジターセンター~湯ノ沢地区-



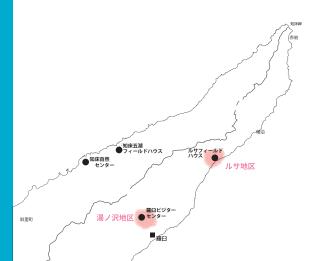
羅臼ビジターセンターのメイン展示.シャチのオス成獣の骨格.

現状と課題・私たちがめざすもの

羅臼ビジターセンターを訪れるビジターはまだ少なく、地域内での知名度も十分とはいえません。羅臼側の国立公園利用の拠点施設として、情報発信やインバウンド対応の機能充実を図り、立ち寄って「役に立つ施設」としていきます。また、周辺も含む環境整備をすすめるとともに、民間事業者と共同のカフェ運営を行うなど、ビジターも住民も気軽に利用できる施設をめざします。

10年後は?

豊富な情報やサービスの提供がなされ、国内外のビジターにとって欠かせない拠点施設となっています。 羅臼町内のユネスコスクールの活動と連携するなど、 地域住民とともに行うイベントも充実、地域社会に親 しまれる施設に成長しています。



国立公園内の園地施設などを 拠点とした活動展開③

ールサフィールドハウスとルサ地区一



ルサ地区.

現状と課題・私たちがめざすもの

先端部地区に立ち入るビジターのための施設として整備されましたが、まだ利用者は少ない状況です。事故防止や自然保護ためのルールを確実に情報提供するために、利用調整地区制度など法的担保をもつ管理システムの導入によって、先端部地区に入るビジターが必ず立ち寄るしくみを整備します。また、先端部での活動に必要な装備品のレンタルも充実させるとともに、休憩機能の充実やキャンプ場、野生動物観察施設の整備などを進めます。

10年後は?

先端部へのビジターには事前のレクチャー受講が義務付けられ、ヒグマ撃退スプレーやフードコンテナなどの先端部地区の必需品のレンタルサービスが充実しています。スタッフとビジターの双方向の情報交換から、最新のフィールド情報がUPDATEされていくしくみができています。周辺では、キャンプ場や野生動物観察できる施設なども整備され、魅力的な園地となっています。



ヒグマ対策用食料コンテナの貸出.

知床国立公園・世界自然遺産を 知り、守り、伝えるための調査研究



生捕りしたヒグマに付けられた標識.

現状と課題・私たちがめざすもの

財団業務が拡大する一方で、職員が国立公園や野生動物の保護管理に関わる先進的な調査研究を継続的に進める体制は十分とはいえません。職員がさまざまな研究会や学会等で常に最新の知識を得て、多様な専門家との人的ネットワークを持ち、それらを知床での課題解決、国立公園管理のシステム開発、教育普及や科学委員会など各種検討の場に役立てていくことができる持続的なしくみを作ります。

10年後は?

学会やシンポジウム等に財団職員が積極的に参加し、多様なセッション・研究集会などの場面で中核的な役割を演じています。財団独自の調査研究、あるいは外部機関との共同研究等が活発に実行され、それらの成果が毎年複数の論文として対外的に発表されています。また、公園管理の現場のシステム開発や利用者への普及啓発活動にも積極的に活用されています。意欲ある学生・大学院生が知床に滞在して、財団との連携や支援下において研究を進め、その成果が知床へも還元されているでしょう。

知床におけるコンベンション機能が充実し、国内外から専門家を集めたシンポジウム等が開催されています。



羅臼地区におけるヒグマと 地域住民の軋轢解消①

ーヒグマに負けない街づくりー



ヒグマが道路や住宅地に出るのを防ぐ電気柵.

現状と課題・私たちがめざすもの

水産加工場の残渣や一般家庭の生ごみなどの誘引物の管理が十分にできていないこと、ヒグマの侵入路や潜伏地となる藪が市街地内外に多数あることが、羅臼におけるヒグマ対策を困難にしている長年の課題です。これらの問題は財団や行政だけではなく、地域住民も主体性を持ってともに改善を進める状況を創出、維持することで初めて解決されるものです。ヒグマを人の生活圏および活動圏に近づけない、呼び寄せない地域づくりをめざします。

10年後は?

水産加工場の残滓や住宅の生ごみによるヒグマ問題が解消されています。侵入防止のための電気柵が必要箇所に整備され、それらのメンテナンスやヒグマが侵入しやすいルートの草刈りなどが地域主体で行われており、ヒグマが人の生活・活動域に近づくことがほとんどなくなっているでしょう。



ヒグマに荒らされた魚干し場.

羅臼地区におけるヒグマと 地域住民の軋轢解消②







ヒグマに関する知識を広めるための一般市民へのレクチャー.

現状と課題・私たちがめざすもの

ヒグマに関する地域住民の危機管理意識やそのための知識はいまだ十分ではありません。児童生徒を対象としたヒグマについて学ぶ授業を継続するとともに、大人向けの講座も行っていきます。また、町内のヒグマ情報がきめ細かく収集され、それらが速やかに住民や関係機関に共有されるしくみを構築し、住民自らがその時々の状況に応じた適切な対応を取ることができる人づくりをめざします。

10年後は?

15歳以上の住民の少なくとも15%がヒグマ対策の正しい知識を持っている状態が実現されています。地域社会の中のヒグマ問題の発生が、地域レベルであらかじめ抑制され、有事の際には速やかな情報周知に基づいて住民自身が適切な対応を行えるようになっています。



学校でのヒグマ学習.

ウトロ・斜里市街地周辺の 野生生物対策



国道沿いのフェンスを乗り越えるヒグマ.

現状と課題・私たちがめざすもの

ウトロ市街地内へのヒグマの侵入や潜伏はいまだに 毎年複数回発生しています。また、街中が藪だらけの 状態はヒグマ対策上大きな問題であるばかりでなく、 世界遺産の冠をいただく観光の街としてふさわしい 美観とは到底言えません。ヒグマを侵入させない環境 づくり、住民やビジターが心地よく過ごすことができ る環境づくりを積極的に進めます。斜里中心市街地で もヒグマが侵入しかねない状況が発生しており、ヒグ マ対策への住民の意識も高いとは言えません。市街地 を防衛する電気柵を適切な状態で維持管理するととも に、斜里市街地のすべての児童生徒へのヒグマ授業の 実現をめざし、保護者対象の学習の機会も設けます。

10年後は?

ウトロ市街地柵内の藪の刈り払い活動や電気柵のメンテナンスが、財団や行政とともに地域住民も主体的に関わって行われ、美しい街並みと安全が両立しています。ヒグマの出没が多い地区では、ゴミ収集ステーションはすべてヒグマ対策型(とれんベア等)に切り替えられ、魚干し場では電気柵で囲って守る習慣が地域に浸透し、市街地内のヒグマ問題はウトロ地区でほとんど発生しなくなります。

斜里市街地の電気柵も常に良好な状態で稼働するようになっています。すべての学校でヒグマ学習が行われるようになり、斜里市街地とその郊外の住民にもヒグマ対策の知識が普及しています。

農地周辺の野生生物対策



知床半島には広大な農耕地が広がる.農業と野生の折り合いの付け方が課題.

現状と課題・私たちがめざすもの

農地の野生動物被害対策を猟友会だけに依存する体制は、近い将来困難となることが明白です。野生動物による農業被害の防除、被害対策の労力低減、及びヒグマの人為的な死亡率の低下をめざして、農業被害に関わる現地調査・防除用の電気柵資材の販売・設置・維持管理・アフターサービスまでの全サービスを、費用負担も頂きながらワンストップで対応する「被害対策事業部門」の設立を検討します。また今後も一定数のヒグマ駆除は不可避であるため、当財団職員の銃器取扱・射撃・安全管理に関する技術の向上を図り、プロフェッショナルとしての現場対応が可能な人材の育成を行います。

10年後は?

ヒグマが侵入しやすい農地の大部分に電気柵が設置されており、かつ的確なメンテナンスも行われています。農業被害の減少に伴ってヒグマの駆除数が減少し、知床半島のヒグマ個体群が健全な状態で維持されているでしょう。万一の際のヒグマ駆除には、高い技能を持つ当財団職員が即応できるようになっています。被害対策事業部門の展開により、農地全体での被害防除が進み、そのための財源も確保されています。



電気柵に行く手を阻まれたヒグマ.

野生生物対策の広域連携の推進



自治体の境界をこえて、知床半島全体に野生動物管理のノウハウを広めたい.

現状と課題・私たちがめざすもの

行動範囲が大きく、世界遺産管理計画の中でも自治体の境界を越えた管理が求められているヒグマやエゾシカについては、広域管理体制を整えることが必要です。知床半島を構成する斜里町・羅臼町・標津町の間で、ヒグマやエゾシカに関する情報共有や現場対応が密接な連携の元に実行できる体制を作ります。また、その他の近隣市町村も含めて、各自治体の要望に応じ、技術供与・物品調達・捕獲事業・現地調査・データ解析等のサービスを提供できる体制を検討します。

10 年後は?

知床半島を構成する自治体間では情報の共有や現場 対応が共通のプラットフォームによってなされていま す。また、その他の近隣市町村に対しても、知床での ノウハウを活用して被害対策のための多様なサービス が提供されています。

森・川・人プロジェクト

一財団としての取り組みと体制一



100年、200年先を見据えた森づくりが続く.

現状と課題・私たちがめざすもの

担当職員の専門性を高めるとともに、長期的な視点を持って森林再生計画を着実に実行することができる体制を再構築する必要があります。外部の専門家等とも密に連携しながら、自然林の再生や生物相復元に関する基礎的な調査研究から現場での事業まで財団が主体的に行う状況を実現します。また事業の成果は科学的に検証し、公表していきます。

サクラマスの生息を回復させることも目標.

10年後は?

人工造林地を自然林へ作り替える作業が運動地全域で本格化しています。ササの掻き起こしによる森林化技術が確立され、未立木地が新しい世代の木々でおおわれていっています。生物相復元に関しては、サケマスの自然産卵が安定化し、第2次復元対象種の再生事業が着手されているでしょう。それらの成果は、多様な外部専門家の支援を受けながらも、財団が主体となって大きく前進させています。

森・川・人プロジェクト

-運動の持続的発展への現地からの支援-



運動の現場から支援の輪を広げてゆく.

現状と課題・私たちがめざすもの

超長期にわたる 100 平方メートル運動の自然再生は、運動への支援の輪を持続させていかなければなりませんが、運動参加者の減少が課題となっています。斜里町が主体の運動ですが、財団は知床自然センターからの情報発信、報道対応や講演活動、運動地を見ていただくトレイル「森づくりの道」の拡充などの活動を通じて、運動への理解促進や参加者の拡大に貢献していきます。運動を支える関東・関西・北海道の 3 支部との協働による現地活動により、支部の活性化や新たな担い手の開拓も図ります。

10年後は?

寄付金総額が10年間で2億円を上回る状態を実現します。「森づくりの道」のネットワークが岩尾別台地まで広がって、知床五湖に至るフットパスとなり、多くの方々に利用していただくことで、運動への理解や参加者の拡大につながっているでしょう。運動の各支部の活動が活性化され、運動参加者の拡大に大きく貢献しています。

幌別 Reborn

~幌別地区の魅力の再発見と再生~





フェスの中で上映されるバンフ・マウンテン・フィルムフェスティバルの映像、

現状と課題・私たちがめざすもの

地域関係者との連携のもとに好評を博した 2018 年の第 1 回 SOFF を発展的に継続し、「MEGA スクリーン KINETOKO」のブランディング、企業からの財団への支援獲得等の機会とします。また、オリジナル映像のコンペティションの場としても大きく育て、観光的にも知床の秋の看板イベントに発展させます。

また、知床自然センターの多様な利用方法を企画提案して、施設の多面的な活用や収益性の向上を図ります。



アウトドアマーケットも開催.

10年後は?

SOFF が知床の定番・看板イベントとなり、SOFF 単体で 5,000 人の集客、20 の出展、50 の映像コンペティションへのエントリー、ウトロ地区内の複数会場での開催が実現しています。また、SOFF は野生動物やアウトドア活動に関する映像の新人・若手映像作家の登竜門として認知されているでしょう。その受賞作はKINETOKO の上映コンテンツの供給源ともなっています。さらに、年間 100 件の施設利用、10 件の外部イベントが誘致され、知床自然センターが幅広く活用されています。

これらの新たな展開はもとより、流氷フェスなど既存のイベントも、地域の多様な関係者が一堂に会する組織体で運営するしくみができ、ウトロ地区の活性と経済波及効果を高めています。

幌別 Reborn 〜幌別地区の魅力の再発見と再生〜

知床自然センターとその周辺の魅力 UP



リニューアルした知床自然センター.

現状と課題・私たちがめざすもの

幌別地区園地の整備から30年以上を経過した今日、知床自然センターからフレペの滝に至る地域全体の利用の在り方を再検討する必要があります。幌別を国立公園のフロントカントリーとして、より魅力的で利便性の高いものとし、来訪者数増加や満足度向上をめざします。そのために、①鮮度の高いフィールド情報等を効果的に伝える機能、②シャトルバス、路線バス等への乗り換えサービスやアクティビティの提案もあわせて担う公園内交通システムの中核施設としての機能、③ゆったりと休憩や買い物ができる機能、そして④多様なニーズに応じた散策路ネットワークのハブとしての機能の充実も図っていきます。

10年後は?

自然センター入館数は年間20万人超が維持され、 KINETOKO有料視聴数が年間5万人台まで回復して収 入が安定することで、次回作へ再投資が行われます。

新たな情報提供システムや歩道の導線や構造の見直 しによって、フレペの滝のヒグマ問題が解消されています。自然センターの利用メニューとして「森づくり の道」が定番化し、コースの延伸により、長時間・長 距離の散策ニーズに合致するロングトレイル的な利用 の場となります。「森づくりの道」トレイルの年間利 用者数は10年間で20%増加しています。

半島を出よう



知床半島の南へのびる野付半島でもエゾシカの増加が大きな問題.

現状と課題・私たちがめざすもの

我が国の国立公園で唯一、シカ個体群の大幅な減少を成功させたノウハウを活用し、道東・道北地区の国立公園や国有林におけるエゾシカ捕獲や調査事業へ参入することをめざします。また、北海道から発注される知床半島以外の「指定管理鳥獣捕獲等事業」についても受注していきます。

10 年後は?

財団は道内各地においてエゾシカの個体数管理業務を本格的に受注しており、各地に拠点や人的ネットワークが構築されています。それらを通じて、冬期の野生動物対策事業の収支バランスが改善されるとともに、財団のノウハウが北海道全体のエゾシカ管理に貢献しています。



道路を閉鎖して行うシカの個体数コントロール事業.

公益財団法人だけど貪欲なプロジェクト



販売事業の拡大

現状と課題・私たちがめざすもの

販売収益は、財団が独自の事業展開を行う上で重要な 財源であり、拡充が必要です。独自の商品開発、卸販 売先の拡大、営業の強化、レンタルサービス等の充実 によって事業を強化・拡大し、収益事業の柱とします。

10 年後は?

販売事業部が立ち上がり、その売上が財団事業費全体の 1/3 (2018 年度を基準とした場合、1億円)を占める状態が実現します。研修実習・視察・講演などに対応する事業は、10年間で現状の約2倍に拡大しています。

寄付・賛助会費の拡大

現状と課題・私たちがめざすもの

寄付金や賛助会費も財団が独自の事業を行うために 必須の財源です。情報発信の強化や会員向け特典サー ビスの再検討をすすめるとともに、法人から支援を頂 くための働きかけも強化して、収入を伸ばしていきま す。

10 年後は?

寄付・賛助会費収入が10年間で1.5倍(3,000万円)に拡大しています。さまざまな財団独自プロジェクトについて、企業等の法人から継続的に支援いただくシステムが構築されています。財団のロゴマークはブランド力をもって全国的に広く知られ、認知度が飛躍的に向上しているでしょう。

組織・人事改革

知床に貢献できる人としくみのために



10年プロジェクトを議論した役員と職員のワークショップ.

現状と課題・私たちがめざすもの

財団の設立者の一つである斜里町の規程に準じた現状のしくみを、経営状態に柔軟に対応できるしくみへと再構築する必要があります。賃金体系の見直し、同一賃金同一労働の考えに基づいた雇用体系の見直し、計画的人事と福利厚生の改善を進め、職員各々の能力が最大限発揮できるような労働環境を整え、活力ある組織をめざします。

10年後は?

事業収益の3割超が自主財源となる状態を実現させ、収益構造の健全化が実現しています。また、経済状況など事業環境の変化や関係法規の改正にも対して、柔軟に対応可能な経営システムを実現させます。職員の能力開発や事業成果を給与体系・雇用体系に反映させるしくみにより、組織の活性と発展が維持されています。

職員の自己啓発の推進

引き出しの数と中身を増やそう



カナダの国立公園への職員研修.

現状と課題・私たちがめざすもの

職員一人一人が自己研鑽に励み、視野を広げ、新たな仕事にチャレンジしていけるよう、職員の意識改革と研修を推進しなければ、財団の持続的展開はあり得ません。それらを可能とする制度の整備や職場環境改善も進めます。知床の保護と利用の調和をめざして、企画提案や対話を通じて、関係行政機関や地域社会とともに知床の進化を支え続ける組織であり続けるための人づくりを強化します。

10年後は?

高い職務能力とコミュニケーション力を有する職員が結集し、知床を「知り守り伝える」財団の活動が、関係行政機関や地域社会とともに幅広く展開されています。それらが新たな価値を生み出し、財団経営の安定化も図られています。

知床財団は、知床を最もよく知る組織、危険な野生 生物や知床の厳しい自然環境に対して適切な指導や危 機管理を行うことができる組織、多様なビジターに知 床の面白さと価値を伝え続けていくことができる組織 として多様な職員を有し、それらの職員は地域社会の 生活者としても根付いているでしょう。



公益財団法人 知床財団

₹ 099-4356

北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531 番地 TEL: 0152-26-7665 FAX: 0152-24-2115